

いきもの記

Vol.180 2026.4.21

3年1組 千葉 美文
(科学研習部生物化学班・鳥研究)

私が初めて書きたいきもの記 (Vol.110サギ山) を覚えておられるだろうか?あの子いきもの記の最後に、学校近くの横十間川親水公園にあるサギ山とそれに隣接する住宅街の話で、「(サギ山が)潰されていないということは人間と鳥が共生できているということなのでとても嬉しく感じた」と書いた。ところが、この時は思いもなかったが、この一文がこのあとの出来事の大きな伏線になってしまったのだ。

序章～共存の難しさ～

2024年12月の事だった。いつものようにサギ山へ調査をしに行くところには多数の木々が伐採された、かわり果てたサギ山があったのだ。「これは一体何が起きているんだ!？」と思い、たまたまその場にいた担当者に聞いてみると「近所からの苦情があった」そうである。懸念していた事態が起きてしまったのだ。Vol.110で述べた通り、サギ山はとても臭いが強く、サギと共に営巣しているカワウは四六時中鳴いているので騒音も深刻であった。周辺の住民からすれば迷惑極まりなかっただろう。当然の反応だ。

本章～絶滅危惧種指定へ～

時は過ぎ、少し前の2026年3月17日、環境省から第5次レッドリストが発表された。これは環境省が定期的に発表している日本国内における絶滅危惧種のリストで、日本国内の絶滅危惧種を決める大変権威あるリストだ。そして、これを見て私は衝撃を受けた。サギ山で営巣するサギ類のうち、コサギとゴイスギが絶滅危惧種Ⅱ類に指定されてしまったのだ。なぜ衝撃かというと、コサギのような猿江で毎朝見られるような身近な鳥が絶滅危惧種に指定されてしまったからだ。とうとう、その辺にいる鳥が絶滅危惧種になる時代が来てしまったのだ。

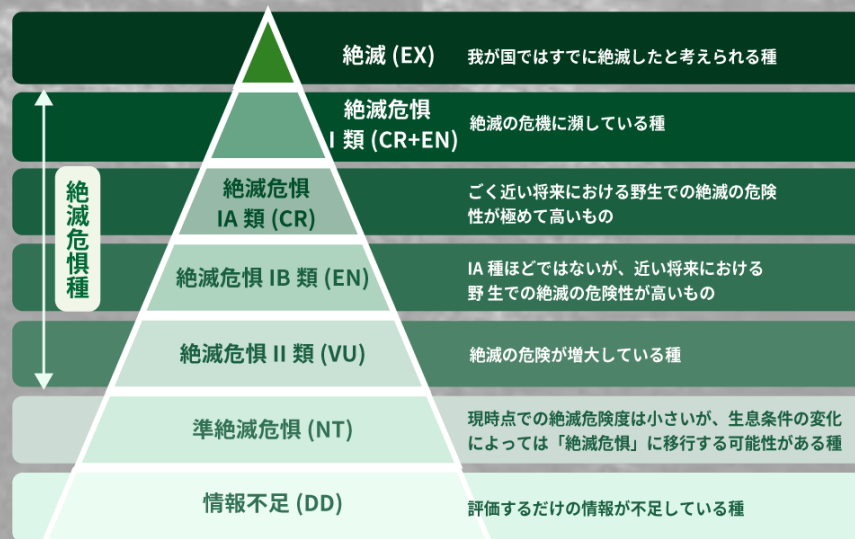
これらの指定理由は「10年間または3世代で3～5割減」というもので、人前によく現れる鳥でも個体数自体はかなりの割合で減少しているということらしい。これは「人目につきにくい減少」であり、人知れず対策されず絶滅してしまう一番危険なパターンなのだ。実際にリュウコウバトは北米で50億羽という聞いたことがないほど多い個体数を誇っていたが、商業乱獲と生息地破壊によって100年足らずで絶滅した。逆にトキやコウノトリ、タンチョウなどの一般の人にも広く認知されている希少種は個体数が回復傾向にあるので絶滅危惧のランクが下げられ、特にタンチョウは絶滅危惧種から準絶滅危惧種に降格した。もちろん、有名な希少種の全てが数を回復させたわけではないが、この「有名な希少種」か「普通種」か、つまり残酷なことに、社会での認知度とそれに伴う手の加え具合でかなり数の増減に違いが見られたということになった。

～つづく

近所の鳥が絶滅危惧種になる時代 野鳥業界衝撃の2日間①



ゴイスギ(左)とコサギ(右)
ゴイスギとコサギはいわゆる「普通種」なのだが、今回のレッドリストで絶滅危惧種Ⅱ類に指定されてしまった。ゴイスギは10年で3割、コサギは5割も減少しているということから指定されたらしい。



レッドリストのランク (標本ナビ多様性生物希少標本ネットワークHPより引用)
コサギやゴイスギが指定されたのは下から3番目のⅡ類だ。低いと思うかもしれないが、準絶滅危惧をとばしていきなり絶滅危惧種なのでより深刻なことが分かる。